

寂聴遺句集

# 『定命』を 読む



2024年5月小学館刊

尼僧にも身じまいはあり初鏡

新年を迎えての喜びと決意。そして尼僧といえども全身を鏡に映した寂聴さんの凛とした美しさと色気も感じました。

(元水薫)

捧げ持つ全集一卷春隣り

ほやほやの全集一卷(二〇〇一年一月二十五日刊行)を手にも、小躍りしながらころころと笑う無邪気な寂聴さんの姿が目につく。「捧げ持つ」から寂聴さんにとっての全集の重み、大きな喜びが伝わってくる。「生きることは書くこと、全集は憧れの頂点」。寂聴さんの声が聞こえてくるようだ。「春隣り」に心弾む、好きな一句である。

(藤村純子)

糸にむこう  
糸尼夢劫遺骨は海にと言いのこす

「双子のよう」と寂聴はいう。熊本・水俣の『苦海浄土』の作家、石牟礼道子と半世紀近い親交があったのだ。石牟礼は一九八七年に出家し、「夢劫」という法名になった。作家同士の交友は出家者同士となる。石牟礼は二〇一八年に九〇歳で死去した。亡くなる前「遺骨は海に」と言いのこした。それを知った寂聴は「いかにも道子さんらしい」と感慨をそのまま句にした。

(米本浩二)

つかの間の危ない平和雛飾る

雛祭りとは、日本の家庭の伝統行事として、日常の中でごく当たり前に行われてきている。

しかし、この句は、平和な日本の日常が実は当たり前のものではないことを、改めて気付かせてくれる。

八月に原爆朗読劇に出演する機会があった。聴きに來た孫たちも、何かを感じてくれた気がしている。(森 裕子)

はるさめにぬれてふるさとやまやさし

春雨にけぶる眉山。桜の季節のこの山は人々にほほえみかけているようだ。眉山の麓で生まれ育った寂聴にとつては、折にふれ思い出す場所であつたろう。そして、眉山もまた、ずっと寂聴を見守つてきた。寂聴がふるさとを離れてからも。この一句は、平仮名のみで書かれている。平仮名の醸し出す優しさ、やわらかさは、ふるさとを思うときの寂聴の心の風と重なっていく。

(藤岡値衣)

## 菖蒲湯に全身ゆだねわが定命

じやうみょう

句集のタイトルとなつた句である。心身を清め、邪気を払うとされる菖蒲湯。清々しい香りが立ちのぼる菖蒲湯につかり、「ああ、いいお湯」とつぶやいている寂聴さんの声が聞こえてくる。

人生の紆余曲折を「生」へのエネルギーで乗り越え、自分自身の命と常に向き合つてきた寂聴さん。その凜とした生き方にリンクする菖蒲の緑が鮮やかな一句。(松尾初夏)

今朝もまたこの世に目ざめ梅雨の声

夜、目を閉じ眠りに落ちる時、「このまま目覚めることがないのでは」と考える。そして朝、「あの世」ではなく「この世」に目覚める。またこの一日を不安と孤独感の中、生きる覚悟をしたのだろう。

フツと、私の九十二の母も、こんな朝を、むかえているのかと、切ない気持ちになった。

(金村理香)

夕顔の吐息しながら開きゆく

庭に出て、ふと何かの気配を感じて振り向くと、そこに昨日まで気付かなかった花が大きく今年も咲き開いていて驚くことがある。花が確かに吐息をもらす。可憐に開く夕顔の白が、ジョージア・オキーフの堂々としたカラーの白に連なる。

「花芯」の作者の感性に寄り添いたくなる夏の夕暮だ。

(東條眞理子)

## 七夕や他人<sup>ひと</sup>には語れぬ願いごと

「雷に撃たれたように人は突然恋に落ちるのよ」と何度となく語っていた。人は何度でも恋をする。語れる恋もあれば墓場まで語らない想いもある。短冊に書くことのない願い事こそが一番強い想いなのかも知れない。

「人は死ぬまで恋をするものよ」と話す寂聴のいたずらっぽい笑顔が浮かぶ。

(清重康代)

## トスカーナはたるは星の墮<sup>お</sup>ちしもの

トスカーナで見た蛍は、星が空から降ってきたように光っていた。

小説「幻日」の中で、恋人晶（井上光晴がモデル）が亡くなって通夜に行ったとき、トスカーナで蛍になって光ってくださいと柩に語りかけた。そして晶の靈魂と共にトスカーナへ旅立ち、無数の蛍を見た。

井上光晴との焦がれるような愛と、儚い別れを蛍が象徴しているように思う。

(齋藤礼子)

## 蝶道<sup>ちょうどう</sup>をふたりたどりし日は夢か

溪沿いの道を女と男が歩いている。「あ、蝶。」先導するように黒い揚羽蝶はしばらく飛んだあと、二人を路上に残し、木々のむこうへ去っていった。残念そうな女の顔。「待ってたらまた見られるよ。今のがあいつの周囲コースらしいからな。」昆虫学ではアゲハ類がたどる一定の飛翔経路を《蝶道<sup>ちょうどう</sup>》という。夢かとおもわれるあの遠い夏の日。

(大石征也)

## 何もなければとふるさとのすだち切る

寂聴さんは、美食家である。そして大きな慈愛の心で人々を接待する。どの人にも愛くるしい和顔施をもつて。正に Fair Share Care の心を持った偉人であった。ある日突然の訪問者があった。心温まる接待がしたいと考えた寂聴さんであったが、冷蔵庫には何も無い。「あっそうだ、徳島から送ってもらったスタチがある。これを切って冷酒をだしましょう。」そんな状況が目に見え浮かぶ。

(鎌田かおる)

## 月も独りといま気付きけり傘寿の夜

八十歳の長寿を祝う節目の夜、何とはなしにひとり見上げた空には雲ひとつない。無限に拡がる夜のしじまにただ月だけがひっそりと佇んでいる様が、家族や大切な人を手放した自分の姿（孤独）と重なったか。不意に寂寞感に襲われ、「ああ、月もずっと孤独だったんだなあ」と、たつた今気が付いた。慌ただし日常の中で、ふとした瞬間に訪れた感覚だったのではないだろうか。

（柳原美鈴）

月もひとりだったと八〇歳の夜に気づいた。それまでは眺めるだけで、向かい合い話しかける対象ではなかった月が、この日から友人になったのではないか。

神々しく輝く夜も、雨で見えない夜も、ぼうつと白い明け方も、月は月。まわりに左右されず、自分の周期で姿を変えて現れる。夜空を仰ぐことが習慣になり、寂聴は星や月に語りかけていたのだろう。

（竹内紀子）

## 死ぬる日もひとりがよろし陽だけ照れ

「人が好き」であることと「孤独を愛すること」は矛盾しないのだと思えた。晴れ女で、どんなときも「えいつ」と気合いを入れるとたちまち雨がやんだ。「こんなに笑うことないでしょ。」と言って、お腹が痛くなるほど笑わせてくれて最後は涙になった。だけど、誰もいなくなつてしんと静まりかえった寂庵でひとり思索を巡らせ、書き続けた時間は先生にとって至福だったに違いない。（鷺尾博子）

## 凍蝶いてらうや亡き魂たま追うかほろほろと

たかくひくく、みぎにひだりに、もつれあつて軽やかに、ともに中空を輪舞するように飛翔していた、つがいの蝶だった。

いま冬を迎え、わたしは病の床に臥して、遠い昔、姿を消したあなたとの自由な飛翔に思いを馳せる。夏の終わりの  
だった。

（鎌田 慧）